

---

# 鍬じいとプチトマト

小春

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鍬じいとプチトマト

### 【Nコード】

N2909Z

### 【作者名】

小春

### 【あらすじ】

ちよっと憎らしいけど可愛い不思議なお爺さんのお話

(前書き)

こんなお爺さん、あなたのそばにいませんか？

「あっ、またやられてる!」

ベランダのプチトマト、今日あたり食べごろだったのに・・・。

ベランダのプランターにささやかな家庭菜園を作って、楽しみにしている。プランターは一つだけなので、一日に一個か二個の収穫だ。それを丁度、食べごろになるとカラスが取っていく。

くやしい・・・!

「おやおや、ずいぶん悔しがってるね。」

どこからともなく、お爺さんの声が聞こえてきた。

一瞬、隣との仕切りを見てみたが、お隣さんではない。お隣さんも彼女と同じ一人暮らしで、お爺さんなど住んでいない。そう思っ  
て、ふと、プランターに目を落としたとき、50センチくらいのお  
爺さんがプランターの陰から姿を現した。

「だれ?」

その爺さんは満面の笑みを浮かべ、にんまり笑った。

「お手伝いに来た。助っ人ってところかな。」

そして、また、にんまり笑った。

「……………」

だって、へんな格好。

テレビに出てる水戸の黄門様みたいな格好して、顎に白い髭まで生やして、白足袋に立派な草履。

でも、肩に鍬、担いでる。

どうして？

「だから今、言ったじゃろ。わしはあんたの手伝いに来たと。」

そう言って、爺さん、鍬を突き出した。

「……………。どうすんのよ。その鍬でこの小さなプランター耕すの？ 必要ないでしょ、そんな鍬……わかった、私が名前つけてあげる。鍬じい、ってどお？ いい名前でしょ。」

「はっ、はっ、はっ、それはいい。」

本当に水戸の黄門様みたいに笑った。豪快に。

「でも、本当に手伝いは要らないわよ。」

「そうかい？ プチトマトみたいに幸運にも逃げられてないかい？ つぎ植えるときはにがうり、つまりゴーヤがええぞ。カラスは食べん。」

「まあ、どうしてそんなに憎らしい言い方できるかな？ わたし、苦いのは嫌いな。第一、可愛くないでしょ。」

「わしの感じじゃが、あんたは少々、ズケズケものを言い過ぎる。だから、その歳まで残ったんじゃないのかな？」

「……何も知らないくせに、余計なこと、言わないで。」

「やはり、ロマンは必要じゃぞ。男はロマンを求めるものじゃ。」

「ロマンだかなんだか知らないけど、鍬じいのほうがロマンがな  
いわよ。」

「なあ、あんた。そうやってポンポン言葉を返すじゃろ、そうす  
ると男は引いてしまうわ。昔の女も強かったよ。でも、優しくもあ  
った。強いのは最後までいい。今のあんたは、逆さまだよ。表が  
強くて中が弱い。言ってしまった後で、いつも後悔をしておる。そ  
して、悲しい気持ちでこのプランターのトマトに水をやる。カラス  
が食ってくれるからいいようなものの、そんなトマトがおいしい筈  
がない。カラスに感謝じゃ。」

「……なに言ってるのよ、私は被害者よ。カラスは泥棒で  
す。」

「ほう、被害者なんて言葉、口にして、ますます嫁にはいけんぞ。」

「だから、いまだき嫁に行くって考え方が古いの。」

ぶい、と膨らんだ私を見て、鍬じいは満面の笑みで返した。

「なつ、負けを認めん。『ごめん』、これが出らん。そうすると  
互いに意地を張って、すれ違って、後はあんたが今まで経験したと  
おり。あんた、自分にとって都合のいい男を捜しているだけじゃな  
いのかな?」

「…… 鍬じいなんかに、わたしの何がわかるのよ。」

「わからんよ、あんたの気持ちなんて。ほら、人にわかってほしいばかりで、あんた人を理解しようとしていない。わしは、あんたの都合では来ていない。」

鍬じいは言いきった。満面の笑みで。

ある意味、恐ろしいのかもしれない。いつも笑みを浮かべている人物など。

ちようどそこへ、玄関のベルが鳴る。

宅急便の配達だ。

先日頼んだ、通販のプランターと土の栽培セットだった。

受け取り、印鑑を押してベランダに戻ると、鍬じいの姿は無かった。

「もう、どこへ行ったの？ 今から、あの鍬が必要なのに…… そうか、あんたの都合に合わせて来てないって言ってたっけ。」

数日後、新しいプランターに植える苗を買いに行こうと思って、プランターを見てみると何か芽が出ていた。

……？

そうして今、わたしはプチトマトを狙うカラスと闘いながら、となりのプランターでにがうりを収穫中です。

きつと、鍬じいが植えていったにがうりだから、思いっきり、に

が  
い  
に  
違  
い  
な  
い。  
。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2909z/>

---

鍬じいとプチトマト

2011年12月10日10時57分発行